

I 研究の概要

1 研究主題

『生き抜く力』を育む学習指導の工夫
～主体的・対話的で深い学びを追求した授業づくり～

2 主題設定の理由

「生き抜く力」を育むために、これまでの基本的な実践を踏襲しつつ、平成29年度は、課題提示や発問、学び合い、まとめ・振り返りなどの授業改善を進め、質の高い授業を目指してきた。平成30年度は、主体的・対話的で深い学びを追求した質の高い授業作りに焦点をあて、実践してきた。生徒たちが何を学び、何を考えさせるのかを教師側もしっかりと考え、知識伝達型の講義形式の授業から脱却し、コーディネート型授業を実践することができた。その中で見えてきた課題は、生徒の見取りや評価である。令和元年度は、新学習指導要領実施を前に、『知識及び技能』『思考力・判断力・表現力等』『学びに向かう力、人間性等』の資質・能力の3つの柱を、主体的・対話的で深い学びを追求した授業を実践し、学習指導と学習評価の充実を図る中で、生徒たちの「生き抜く力」を育んでいきたい。

3 研究内容

(1) 【重点1】 授業改善 【平成29年度の実践】

① 「まとめ」と振り返りの充実

- ・学習課題とまとめの整合性を図り、学んだことを明確にさせる。
- ・「振り返りの視点」を適切に示すことで、学びを充実させる。
- ・「振り返りタイム」を設定し、振り返ったことを発表するなどして、学びの共有を図り、学習の深まりにつなげる。

② 学びあいのコーディネート 【平成30年度 実践】

- ・自力解決を踏まえて小集団を設定するなど、学び合いが活性化するようにさせる。
- ・討論や意見交換など対話を重視した学び合いを深め、視覚的に表現できるようにさせる。
- ・互いの意見や考えを比較・検討する活動を取り入れ、学びが深まるようにさせる。

・伝達型（講義型）からコーディネート型へ

③ 学習指導と学習評価の充実 【令和元年度 重点】

・指導と評価を一体させ、主体的に学ぶ姿を育成する。

・生徒の変容を見取る具体的な評価方法を検討する。

（ポートフォリオ・パフォーマンス・レポートなど）

・生徒が学習改善できるような評価を行い、教師の指導改善につながるようにする。

④ 授業相互参観

・授業交流期間を設定し、授業交流を指定された（研究部員の）授業を参観し、感想をまとめて交流する。

・主体的・対話的で深い学びを意識した授業を実践し、評価方法について検討する。

(2) 【重点2】生活改善

① スコラ手帳の活用

② 家庭学習の充実

(3) 【重点3】小中一貫教育に関する取り組み

① 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善

・算数数学での少人数指導

② 小・中学校の接続を意識した指導

・15歳の姿の設定と学習系統図の作成

・学力向上に向けた取り組みの共有と連携した指導

4. 成果等の把握と検証の手立て

授業研究と授業公開、授業相互交流（北日吉小との連携）、仮説検証授業を実施する。また、外部の講師を招聘し、検証授業の評価・助言・示唆をあおぎ、研究主題に迫る。

授業研究を中心に仮説検証し、検証授業を公開し「主体的・対話的で深い学びを追究した授業」の構築に努める。そのため、研修日を定例化し、組織的・計画的に研究活動を進める。

一学期	4月 研究主題・研究仮説の提案 ☆研究計画の検討など
	6月 〈小中授業交流月間〉 6月最終週～ 7月2週目まで

二学期	11月 特設検証授業〔特設授業〕・事後研究 (理数部会) (授業者 小林 元貴・鈴木 亮) 11月 小中授業交流月間) 11月最終週～ 12月2週目まで)
三学期	3月 研究の成果と課題の検討 次年度の体制づくり

II 具体的な取組

1 授業改善について

「主体的・対話的で深い学び」を中心に課題解決学習の一層の充実を図り、職員の意識を高めた。学習指導と学習評価の一体化を図り、評価方法の工夫を行った。また、生徒自身の学びに向かう姿勢を育成させるために個別の学習相談や家庭学習とのリンクを図って学力の向上に向かう体制を整えた。

2 生活改善について

スコラ手帳を使いながらP→D→C→Aのサイクルにより、「自己指導能力」の育成を様々な場面で促した。本校の重点教育目標「自ら考え 自ら学び 主体的に行動する生徒の育成」につながっていったものとする。

保護者への発信強化と学校全体での高い意識化を図るための取組を行った。参観日や学校だより、学級通信、研究通信などにより啓発した。

III 実践の成果と課題

◇成果と課題

- ・目標やまとめなどは提示できていた。各教科で「行っている」「おおむね行っている」は約90%となった。教科の特性もあるが、提示方法や内容の吟味を行うべきであり、生徒が主体的にまとめや振り返りをできる工夫が必要である。
- ・各教科で実践することで、集団での協力、協働ができ、学習活動が円滑に進められている。また、言語活動が充実し、表現力の向上が見られた。実践を通して、発表に相互評価を取り入れることや、教え合い、高め合える環境をつくることができた。ただ、能力差が激しい教科は、受け身となり、協働学習が主体的にならない部分もあった。また、人間関係の固定化が集団学習にも影響していた。『対話的』な場面における変容のみとりをどのように行うかなど、評価の場面や方法に課題があった。

- ・1単位時間で、ワールドカフェやロールプレイなどを行うことで、発表場面を評価として位置付けることができた。また、単元の振り返りとしてのレポートでは、1枚の紙に要点をまとめることを通して、個人の学びをみとることができた。課題は、1単位時間の評価に限らず、単元を通じた学習指導と学習評価の計画と見直しである。
- ・習熟度別授業の実践では、小学校段階からの取り組みによりスムーズにできた。少ない人数で集中し、習熟度で取り組みたい生徒がいて、意欲的に行うことができた。課題は、数学教師のみによる実践は時間割の調整が難しかった。進度調整も難しく、通常授業とのバランスを考える必要があった。
- ・習熟度別授業の実践は、小学校段階からの取組により、混乱なく進めることができた。より少人数で取り組める習熟度別の授業を選択する生徒は多く、大変意欲的な授業態度であった。

・スコラ手帳の活用

成果	課題
①家庭学習が30分以上伸びた…約70%	①書くことができる生徒、できない生徒の差をどのように埋めるか。 ②アンケートで否定的な意見があった保護者の理解と協力 ③週1回の確認方法だと教師の多忙感が生まれる。
②1週間の目標設定ができるようになった…約80%	
③書くことが増えた…約90%	
④勉強や睡眠等正しい生活習慣が身に付いた…約90%	
⑤忘れ物や提出物を忘れることが減った…約90%	
⑥計画、実行、振り返りができた…約90%	

IV 来年度へ向けて

○新学習指導要領実施に向けた準備

- ・基礎基本の知識の習得と活用を目指した授業改善
- ・学習指導と学習評価の一体化
- ・小中接続の観点から互いの学習内容を把握し、児童生徒理解を高め、15歳の学びの姿を意識した指導の意思統一

○生活改善と自己管理能力の向上

- ・スコラを活用し、セルフマネジメント能力を育成する

研究部だより

平成30年8月28日（火）

教務部・研究担当

文責：小林元貴

No. 2

研究指定校に関すること

○小中一貫教育に関する内容を北日吉小学校と一緒に取り組みます。主に算数・数学が中心となります。

<現在取り組み始めたこと>

○家庭学習のしおり（4月に昨年度のしおりを変更したものを作成済み）

○学習スタンダード作成（北日吉小で作成。北中学習条規を参考。課題は、15歳の姿を考える。）

○学力向上年間計画の作成（原案は作成済み。）

○全国学力学習状況調査の分析（これからです。）

○9年間を踏まえた小学校との学習内容のつながり（算数・数学で9年間の系統図などを小中で共有）

<今後進めていく予定のこと>

○校内研ブレ研（数学）指導案作成・授業実施・小中つながりの検討

○主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善・授業実践

○全国学力学習状況調査の分析・改善策の検討

○中学1年生になるまでに身につけてほしい力の検討

○中学3年生「15歳の姿」の検討

夏休み中の研修報告

夏休み中に、函館市道德研究会の夏季研修会が行われました。亀田中学校の田中登教頭先生の講演で、道德の教科化に向けて、『今からできること』として『（主）発問と問い返し』という題材で行われました。教科化になると、教科書とノートが配布され、それを元に授業を行っていくこととなります。今、行っている副読本の活用や自作教材の活用でもできることは、次のことになるそうです。

○主発問の吟味

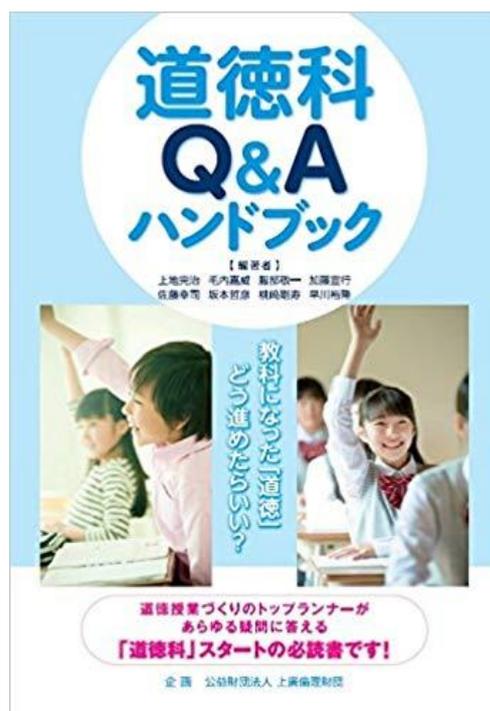
・場面発問、テーマ発問を吟味する。1時間の道德の中で、児童生徒に対して、何を考えさせ、何を学ばせたいかをじっくり考えていく必要があります。

○問い返し

・児童生徒の一人での解釈や解決に至ることで終わらず、多角的多面的な広がりや深化を求める観点で、問い返しを吟味していく必要があります。

※『道德科Q&Aハンドブック』という本を函館市道德研究会の研修

会でいただきました。たくさん参考になる部分があると思います。気になり、読みたい方は、小林の席の後ろに本がありますので、一声かけてください。簡単に入手できない書籍だそうです。



研究部だより

平成30年11月2日（金）

教務部・研究担当

文責：小林元貴

No. 4

全体研修を終えて

全体研修、ご協力ありがとうございました。各教科で今年度の研究の成果と課題を考えていただきました。日ごろ、教科部会などを行う時間もないので、同じ教科の教員が話しをする姿、色々意見を出し合う姿が見られて、良かったと思います。

学び合いのコーディネートでの成果

- 各教科での実践があり、集団での協力、協働ができていて、学習活動が円滑に進められている。
- 授業公開や研究会を通して、様々な実践を学び、挑戦することができた。
- 話し合いや教え合いはできている。理解に差はあるが、主体的に取り組む様子が見られている。
- 他教科での実践があり、表現力や言語活動が充実している。
- ペアやグループワークを実践してきた。発表に相互評価を取り入れたり、教え合い、高め合える環境をつくることができた。

課題

- 能力差が激しくなっていく教科のため、受け身で協働学習が主体的にならない一部を改善したい。
- 人間関係が固定していて、コミュニケーション能力が教科にもマイナスになることもある。
- 基礎基本の定着に時間がかかる。
- 変容のみとり（客観的にみとる方法）
- 学力が二極化していて、わかっている生徒への課題提示や内容の吟味
- 学び合いではなく教え合いが現状。小先生を育成しつつ、グループでの課題学習などを設定したい。
- 実践が他の学習活動に生きているか
- 教材の取舍選択
- 大学入試などの変化で中高の連携も必要かと
- 終末での評価会を行いたい。時間を有効活用したい。

研究部だより

平成30年10月3日（水）

教務部・研究担当

文責：小林元貴

No. 5

指定校の取り組み状況について

学力向上に向けた取組

北日吉小学校、北中学校

全国学力・学習状況調査の結果から、学力向上に向けての取組について成果と課題が明らかになった。北日吉小学校、北中学校、それぞれの学校が抱える諸問題の解決に向けて、今年度は次の通り視点を設け学力向上に向けた取組を進めることとした。

取組1 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善

北日吉小学校

・資質・能力を育むための少人数指導

本校では、4・5年生の算数科の学習において、4月より少人数指導を行っている。1学級を2分割し習熟度別の指導を行うことで、個に応じた支援がより充実し、資質・能力の育成を図ることができると考えている。

また、他の学年においてもTTでの指導を行っている。これにより全校体制での指導が可能となり、学力向上に向けての学校ぐるみの取組を進めている。

・学習意欲を高めるための工夫

主体的な学びの実現のためには、課題を自分ごととしてとらえる必要があると考える。課題提示の仕方を工夫することで、より主体的な学びになるものと考えている。

また、対話的な学びには「自己との対話」「他者との対話」がある。「自己との対話」では、自力解決場面の時間の確保、解決に向けての支援の在り方について工夫を行う。「他者との対話」では、交流場面の効果的な設定について工夫を行うことで、自己の考えの変容に気付かせ、より深い学びの獲得を目指している。

北中学校

・学び合いのコーディネート

昨年度までは、課題提示・まとめや振り返りを中心に一時間の授業について考えてきた。課題提示・まとめや振り返り、話し合い活動もおおむね各教科で実践できている。

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、生徒自身が学びに向かう主体的な姿勢を育成する必要がある。そのために、教師が主体となる授業を実践するのではなく、生徒が主体的に活動できるような授業を考えていくことが重要である。そのために、自力解決を踏まえた小集団を設定するなど学び合いが活性化するような授業づくりを行っている。また、討論や意見交換など対話を重視した学び合いを深め、視覚的に表現できるようにする。これらの活動を各教科で実践し、生徒が互いの意見や考えを比較・検討する活動を取り入れることで学びが深まるようになって考えている。

取組2 小・中学校接続を意識した指導

・学習の系統図の共有と「15歳の姿」の設定（資質・能力の明確化）

北日吉小学校と北中学校では、小・中学校接続を意識し、連携した指導を目指している。今回の取組では、算数科の「数量関係」、その中でも比例と反比例に関わる領域について、学習の系統図を小・中学校で協力して作成し全職員に周知を行った。また、9年間の指導の最終的な児童の姿を「15歳の姿」として明記することで、目標に向けた統一した指導が進められるものと考えている。

・学力向上年間計画、学習常規、家庭学習のきまりなどの共有と連携した指導

学校がチームとして学力向上に取り組み、更に9年間を見越した指導を行うことができるよう学力向上年間計画を作成し、学校間で交流を行っている。また、学習常規は3年前から、家庭学習の決まりは2年前から中学校と接続を図っている。